



Interview

私がいいた頃の米国とは 全く変わってしまった

長島昭久 ● 衆議院議員

ここまでの大統領選挙を見ていると、米国社会が抱えているゆがみが、想像以上に深刻だと感じます。

ドナルド・トランプは、既存の政治家、エスタブリッシュメントに対する軽蔑と憎悪をエネルギーにして、ここまで支持を伸ばしてきた。逆にヒラリー・クリントンは、エリートとして完璧な経歴が、重荷になっています。對抗馬のバーニー・サンダースのように社会主義者を称している候補が、意味のある一定の票を集めたのも、久しぶりです。

日本と比べると、率直に成功者をたたえるのが米国の美徳でした。それがいまやそうではありません。もともと米国社会は格差が大きかったが、格差がバイタリティーも生んで

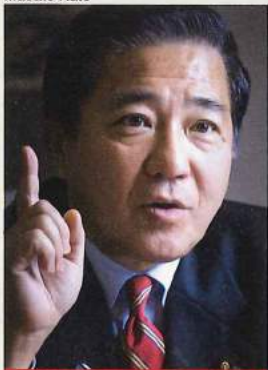
いました。それが絶望感に変わっている。僕がいいた1990年代の活気ある米国とは、全く違ってきます。このままだいけば、

民主党はヒラリー、共和党はトランプが大統領候補になるでしょう。ヒラリーが優勢だと思いますが、番狂わせが起きないとも限りません。

もし、トランプが大統領になったら、気になるのは、彼が日米安全保障体制はアンフェアだと発言していることです。「米国は日本を守る義務があるのに、日本が米国を守る義務はない。双務的ではなく片務的だ」と。それが支持者に受けている。

安倍晋三首相は安保関連法制を整備しましたが、それでは不十分だと新たな要求を出され、日本が受け身の形で動く、反米機運が大きくなり、日米関係がぎくしゃくするリスクが高まります。TPPについては、いまは両者とも反対ですが、ヒラリー

Masato Kato



ながしま・あきひさ / 慶應義塾大学大学院、ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院修士課程修了。米外交問題評議会 上席研究員などを務める。民主党政権では防衛副大臣などを歴任。

ーが本選挙でどう発言を修正するかに注目しています。それはサンダースが、いつ選挙戦から撤退するかにも影響を受けるでしょう。

(談)